

研究論文

日本大学日本語講座に参加した大学生ボランティアの特性 —大学生ボランティアへの効果的な支援を目指して—

田川 恭識*

日本大学日本語講座

Characteristics of University Student Volunteers Participating in the Nihon University Japanese Language Program: Toward Effective Support for University Student Volunteers

Yukinori TAGAWA

Japanese Language Program, Nihon University

Abstract: The Japanese Language Program (JLP) at Nihon University offers a distinctive intercultural learning environment in which domestic students support international students' Japanese language learning while engaging in collaborative activities. While some volunteers appeared confident and socially outgoing, others participated despite initial hesitation or psychological barriers. As the volunteers vary widely in their interpersonal styles and approaches to collaboration, understanding their personality traits and competencies is essential for providing effective support and fostering their growth.

Using the Big Five personality framework and a questionnaire on the Basic Competencies for Working Persons, data were collected to identify patterns in volunteers' traits and competencies. A cluster analysis revealed three distinct groups: one group with consistently high scores across all competencies, especially in communication and problem-solving, and two groups with lower scores. Although the latter two groups exhibited similar behavioral tendencies, their underlying personality traits differed, suggesting different psychological factors influencing their engagement.

These results highlight the diversity among JLP volunteers and underscore the importance of support strategies tailored to their individual characteristics, enabling each student to participate meaningfully and achieve personal growth through the experience.

キーワード：日本語講座, 性格特性, 社会人基礎力

Keywords:

Japanese Language Program, Personality Traits, Basic Competencies for Working Persons

1 はじめに

1. 1 日本大学日本語講座について

日本大学日本語講座（以下、JLP）では、大学間交換留学協定および学部間交換留学協定によって来日した留学生に対し、日本語教育を行っている。JLPは3学期制で1学期は約2カ月半と短い。しかし授業は毎日あり、インテンシブなプログラムとなっている。JLPの日本語科目には、月曜から金曜の1～2限に連続

*E-mail: tagawa.yukinori@nihon-u.ac.jp

投稿：2025年6月10日

受理：2025年6月20日

して開講されている総合型の日本語科目（以下、総合クラス）と、火曜日と木曜日の午後に開講されている選択科目（以下、選択クラス）がある。総合クラスはレベル別で、日本語未習者および初級前半の学習者を対象とした A クラスから、上級レベルの学習者を対象とした E クラスまで、計 5 クラスある。選択クラスは火曜日の午後に 3～4 限連続の科目（「異文化体験」、「クリエイション」、「探究」）、木曜日に 3 限のみの科目（「自律学習 I・II」、「コミュニケーション」）が開講されている。選択クラスの 6 科目のうち、半分はどのレベルの学習者も履修することができる。このように多様なクラスが開設されていること、また少人数のクラスが多く、教師側からのフォローが手厚いということが JLP の特徴である（田川と中村, 2018）。加えて、日本大学の学生が留学生支援のため、日本語の授業や JLP の諸活動に参加することも大きな特徴と言える（以下、本研究では JLP に参加し、活動する日本大学の学生のことを、「ボランティア」または「学生ボランティア」と呼ぶ）。学期にもよるが、総合クラスでは週 2 回、2 時限目にボランティアが参加する「ボランティアセッション」がある（2025 年度第 1 学期時点）。また、選択クラスには毎回ボランティアが参加して授業が行われる。授業の中でのボランティアの役割はクラスによって異なり、会話練習のパートナー、作文執筆の支援、プロジェクトワークへの参加など多岐に渡る。

ボランティアは授業の外でも留学生と交流を行っており、留学生の日本語力の向上はもとより、文化理解にも大きな助けとなっている。JLP では学期末に留学生を対象とした授業評価アンケートを行っているが、その中で「このプログラムを受講してよかったか」、「このプログラムを他の学生に勧めたいか」という質問に対する回答（2023 年度第 3 学期）は、「非常にそう思う」から「全然そう思わない」までの 4 段階評価で、全回答者（10 名）の評価が 4 であり、参考値ではあるが、高い評価を得ている。プログラムに対する自由記述では、ボランティアとの交流、ボランティアによる支援について言及している留学生が多く、JLP への高い評価にはボランティアの存在が大きく影響していると考えられる。

1. 2 JLP のボランティア

JLP のボランティアには日本大学の学生であれば誰でも参加可能であり、さまざまな学部、研究科の学生が活動している。JLP は、2018 年に市ヶ谷の日本大学本部の施設から、千代田区神田三崎町にある法学部に移転した。JLP は法学部内にあるため、法学部所属のボランティアが多いが、中には遠方の学部から通ってくるボランティアも少なくない（表 1）。ボランティアは無報酬であり、交通費も支給されない。また学部、学科による単位認定といったものもない。このような状況の中で、1 学期で活動を終えるボランティアもいるが、複数学期、また数年に渡って活動を続けているボランティアも多い。

先に留学生による授業評価アンケートに触れたが、JLP ではボランティアにも同様のアンケートを実施している。その中で、「ボランティアとして授業に参加することは、自分にとって意義があった」という項目に、「非常にそう思う」から「全然そう思わない」までの 4 段階で回答してもらったところ、平均値が 3.84（2023 年度第 3 学期、回答者数 33 名）、また「ボランティアとして活動したことは、自分の成長のためにプラスになった」への回答については平均値が 3.81（同）と、高い評価が得られた。JLP は本来、交換留学生を対象とした日本語教育プログラムであるが、日本大学の学生ボランティアにとっても、多文化との交流を通して成長する場となっていることがうかがえる。JLP としても学期中に Exchange café と呼ばれる交流会や、Language Exchange Partner 制度といった言語交換による相互学習制度を設けるなど（田川, 2025）、留学生とボランティアが授業外でも交流できるよう制度設計に努めている。JLP での交流を通して生まれた留学生とボランティアとのつながりは一時的ではなく、卒業しても関係が続いていることが多い。ボランティア同士の関係も同様であり、ボランティアとして活動していた学生たちが、社会に出てからも交流を続けている。

以上のように、JLP での活動は多くのボランティアにとって有意義であり、活動から得られた経験はかけ

表1 2023年度在籍ボランティアの所属学部と学科

学部・学科	M1	U1	U2	U3	U4	合計
危機管理学部	0	0	0	2	0	2
経済学部	0	3	3	7	6	19
芸術学研究科	1	0	0	0	0	1
芸術学部	0	2	1	3	2	8
商学部	0	0	2	0	0	2
通信教育部文理学部	0	1	0	0	0	1
文理学部	0	1	2	1	0	4
法学部	0	7	8	13	1	29
理工学研究科	1	0	0	0	0	1
理工学部	0	0	2	1	1	4
合計	2	14	18	27	10	71

U=学部, M=大学院

がえのないものになっている。しかしながら、活動を通して充実感を感じているボランティアが存在する一方、心理的な不安や葛藤を抱えている者も少なくない。実際に学期末の授業評価アンケートには、活動中に内面的な問題を抱えていたことがうかがえる記述も見られる。不安や葛藤の背景には、自身の外国語運用能力に対する自信の無さ、「留学生に正しい日本語を教えなければならない」といった過度な責任感、また対人コミュニケーションそのものに対する苦手意識など、様々な要因が存在していると考えられる。JLPではこれまでボランティアの不安を軽減するため、事前ワークショップの開催やボランティア同士のつながり作りなど、さまざまな支援を行ってきた。しかしながら、これらはボランティア全体を対象とした支援であり、個々の特性まで考慮したものではなかった。

大学生が学生生活で感じる不安についての先行研究では、不安や葛藤の感じ方には個人差があり、性格特性が大きく関係していることが報告されている（田中と菅，2007）。以上を踏まえると、ボランティアに対してより効果的な支援を行うためには、ボランティアの特性に配慮することが望ましいと考えられる。そこで本研究では、ボランティアの性格特性と社会的場面における行動的側面に焦点を当て、その特性を把握することを試みる。調査対象者は2023年度に日本語講座で活動した学生ボランティアで、質問紙法により調査を行い、得られたデータに対して統計的分析を行う。具体的には、パーソナリティ研究において広く用いられているビッグファイブ理論に基づきボランティアの性格特性を明らかにし、クラスター分析によってタイプ分類を行う。続いて、社会生活を営む上で重要とされる「社会人基礎力」を測定し、性格特性との関連について検討する。最後に調査結果を総合し、JLPのボランティアに対する有効な支援方法について検討を行う。

2 性格特性に関する調査

2.1 ビッグファイブ理論

人の性格に対する関心は古代から現代まで絶えることはなく、心理学においては「パーソナリティ」とし

て体系的に研究されてきた。パーソナリティ研究には、性格をいくつかのタイプに分類する「類型論」と、性格を複数の因子からなる連続的な特性として捉える「特性論」とがある（谷，2021）。このうち、特性論の中でも代表的な理論として知られているのが「ビッグファイブ理論」である。ビッグファイブ理論は、自然言語に現れる性格記述語を統計的に分析し、性格特性を「外向性」「協調性」「誠実性」「神経症傾向」「開放性」の5つの因子に基づいて記述・把握するモデルである（Goldberg, 1981）。Costa and McCrae (1992)はこの枠組みを理論的に発展させ、性格を、生得的な「基本的傾向」と、経験や環境とのかかわりによって形成される「特徴的適応」からなる二面構造として捉える理論モデルを提唱した。この理論的精緻化により、ビッグファイブ理論は性格研究における標準的なモデルとして広く受け入れられるようになった。

ビッグファイブの構成因子である「外向性」は、活発さや社交性、対人関係における積極性と関連する。「協調性」は、他者への共感や配慮、利他性、協力的態度などに関連し、良好な人間関係を重視する傾向を示す。「誠実性」は、計画性や自己統制、責任感、粘り強さなど、目標達成に向けた努力的態度と関連する。「神経症傾向」は、情緒の不安定さ、否定的感情の生起のしやすさ、ストレスへの脆弱性を示す特性であり、主観的幸福感との負の関連が報告されている（Soto, 2015）。「開放性」は、新しい経験に対する関心や好奇心、想像力の豊かさ、芸術的・知的な感受性との関連が示唆されている。

ビッグファイブ理論は、測定の実現性と予測力の高さから、標準的なモデルとして広く用いられている。一方で、その多次元的な構造ゆえに、他の心理的指標や社会的特性との関係を明確に捉えることが難しいという指摘もある（小塩，2010）。こうした課題に対し、ビッグファイブの得点パターンに基づいてクラスター分析を行い、性格特性を類型的に把握しようとする研究も行われている。中でも Asendorpf *et al.* (2001) は、クラスター分析により、Resilients（神経症傾向が低く、他の特性が高い者）、Overcontrollers（神経症傾向が高く、他の特性が低い者）、Undercontrollers（外向性が高く、協調性が低い者）という3つのパーソナリティ類型（Personality Prototypes：PPs）を提唱している。また嘉瀬ら（2017）は、日本人大学生を対象とした研究において、外向性が低く協調性が高い Not Identifiables という新たな類型の存在を報告している。

本研究においてもこれらの知見を参考に、性格の傾向やタイプを明らかにすることを目的として、性格特性の測定およびクラスター分析を行った。これにより、ボランティアの性格特性をより統合的に把握することが可能となると考えた。

2. 2 性格特性調査

2023年度、JLPに参加した学生ボランティアを対象に、性格特性に関する調査を実施した。性格特性の測定には、Gosling *et al.* (2003)によって開発された Ten Item Personality Inventory (TIPI) の日本語版である TIPI-J（小塩ら，2012）を使用した。TIPI は、ビッグファイブの各因子をそれぞれ2項目ずつ、計10項目で簡便に測定できる尺度である。調査は各学期の開始時に Google Forms を用いて実施し、延べ71名のボランティア登録者のうち63名から有効回答を得た。表2に、各因子の基本統計量を示す。統計解析には JASP (Jeffreys's Amazing Statistics Program, version 0.18.3.0) を使用した。分析の結果、5因子のうち最も平均値が高かったのは協調性であり、最も低かったのは誠実性であった。

続いて、これらの得点をもとに階層的クラスター分析（ウォード法・平方ユークリッド距離）を実施した。その結果、解釈可能性を踏まえ、3クラスター解が最適と判断された（図1）。各クラスターにおける5因子の標準化得点（平均値）を表3に示す。なお、以下で用いる「クラスター1」「クラスター2」「クラスター3」という呼称は、クラスター分析の結果得られた分類に対して便宜的に付したものであり、理論的に定義された性格類型やパーソナリティ・タイプを意味するものではない。

クラスター1のタイプ（男性8名、女性23名）は、外向性、協調性、誠実性、開放性がいずれも低く、

表2 ビッグファイブ各因子の基本統計量 (n = 63)

因子	平均値	標準偏差	最小値	最大値	信頼区間 平均	
					95%下限	95%上限
外向性	8.603	2.893	3	14	7.874	9.330
協調性	10.952	1.896	6	14	10.475	11.430
誠実性	7.730	2.477	3	13	7.106	8.350
神経症傾向	8.349	2.695	3	13	7.670	9.028
開放性	9.349	2.444	2	14	8.734	9.965

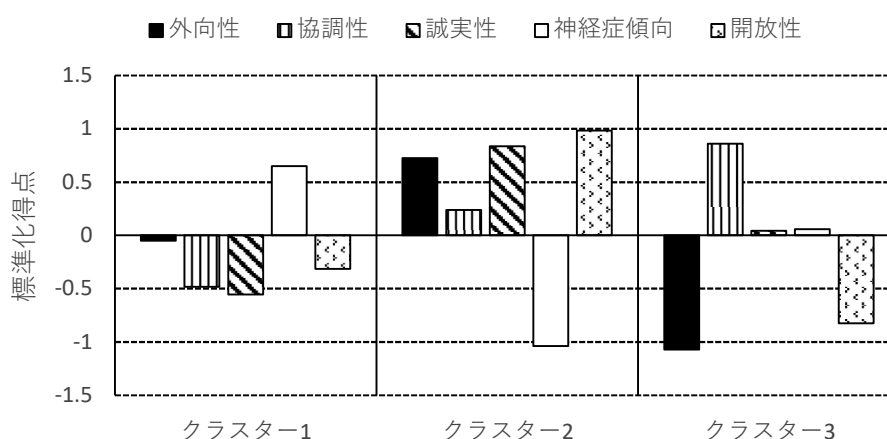


図1 クラスター別ビッグファイブ因子得点の比較

表3 性格特性に基づくクラスター別標準化得点 (平均値)

クラスター	外向性	協調性	誠実性	神経症傾向	開放性
クラスター1	-0.052	-0.485	-0.555	0.648	-0.314
クラスター2	0.725	0.236	0.836	-1.039	0.982
クラスター3	-1.072	0.860	0.042	0.056	-0.825

神経症傾向のみが高いという特性構成を示している。このことから、クラスター1のタイプに該当するボランティアは、感情が安定せず、対人関係や課題遂行に対して消極的な傾向を持つと考えられる。特に、協調性や開放性の低さは、他者との協働や新しい経験に対する不安やためらいとして表れる可能性がある。

クラスター2のタイプ（男性7名、女性13名）は、外向性、誠実性、開放性が高く、神経症傾向が顕著に低いことから、情緒的に安定しており、対人関係に前向きで、知的好奇心や自己統制力を備えていることがうかがえる。これらの特性の組み合わせは、対人場面において柔軟に対応し、自発的に行動することを可能にすると考えられる。

クラスター3のタイプ（男性1名、女性11名）は、協調性が高く、外向性と開放性は顕著に低い。他者に対する配慮が見られる一方で、自身の考えや関心を積極的に表すことには慎重であり、新しい経験への興味も控えめであることがうかがえる。

2. 3 性格特性に関する考察

以上の特性構成を先行研究と比較すると、クラスター1のタイプは神経症傾向が高く、他の特性が低いことから、Asendorpf *et al.* (2001) で報告された Overcontrollers (以下、O型) の特徴と類似していると考えられる。クラスター2のタイプは、神経症傾向が非常に低く、他の特性が高いという点で、同研究で提示された Resilients (以下、R型) に該当すると解釈できる。クラスター3のタイプについては、外向性が低く協調性が高いという点で、嘉瀬ら (2017, 2018) により報告された Not Identifiables (以下、N型) と類似する特性構成を示している。

なお、本研究では、先行研究で報告されている Undercontrollers (統制不全型：誠実性と協調性が低く、他の特性が高い者) に該当する類型は確認されなかった。この点については、Asendorpf *et al.* (2001) および嘉瀬ら (2017, 2018) の研究が大規模かつ無作為抽出によって実施されているのに対し、本研究の調査対象は比較的少数であること、また Asendorpf *et al.* (2001) などと異なり、年齢層も10代から20代前半に限定されていたことが影響している可能性がある。

JLPは、多様な文化的背景をもつ留学生が集い、交流を通じて日本語を学ぶ場である。このような場にボランティアとして参加することは、多様な価値観に触れ、他者と協働する中で視野を広げる機会となる一方で、困難を伴うこともある。こうした環境に自ら身を置こうとする者には、一般に、積極性や好奇心、対人志向性、変化への柔軟性といった特性が備わっていると想定され、これらの特性は、先行研究で示されているR型のパーソナリティに近いと考えられる。しかしながら、R型に類似するクラスター2のタイプに分類されたボランティアは、全体の約3割にとどまっていた。一方、慎重で内向的な傾向をもつO型に類似するクラスター1のタイプや、自己主張を控え、周囲との協調を重視するN型に近いクラスター3のタイプのボランティアの方が、多くを占める結果となった。これは、JLPに参加するボランティアが、必ずしも積極的で開放的な性格傾向を有しているとは限らないことを示しており、注目すべき知見である。

JLPではこれまで、ボランティアの不安や葛藤を軽減するため、ボランティア全体を対象としてさまざまな支援を行ってきた。しかし性格特性の分析から、ボランティアは一様ではなく、異なる性格特性を持っていることが明らかになった。これは、ボランティアが活動において抱える問題や困難点も異なる可能性を示しており、今後はこうした性格特性の違いを踏まえた、より柔軟な支援体制の構築が求められる。

有効な支援策を得るためには、性格特性という内面的な傾向だけでなく、それが実際の活動場面でどのような行動として表れるのかを把握することが重要である。そこで、性格特性に加えて、社会的場面における行動的側面にも着目した。具体的には、近年、大学におけるキャリア教育や企業の人材育成などの分野で注目されている「社会人基礎力」を指標とし、各クラスターに属するボランティアがどのような特徴や傾向を示すのかを検討する。

3 社会人基礎力に関する調査

3. 1 社会人基礎力の因子

実社会においては、自分を取り巻く環境の中で、自ら考え行動し、周囲と協調しながら生きていく力が求められる。経済産業省 (2006) は、社会情勢や労働環境の変化を背景に、職場や地域社会で多様な人々と仕事をするために必要な基礎的能力を表す概念として、「社会人基礎力」という枠組みを提示している。「社会人基礎力」は、3つの能力領域（「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」）と、それに対応する12の能力要素から成り立っている。「社会人基礎力」という名称からは社会人向けの資質を連想しやすいが、実際には主体性や柔軟性、規律性といった、あらゆる世代が社会生活を行う上で求められる力を含んで

いる。引原ら（2016）は、これらの能力は学生の自発性や積極性、他者との協働を通じた対人相互作用といった行動特性に関わると指摘している。

こうした背景を踏まえ、大学生を対象とした社会人基礎力に関する研究も多数行われている。新居田ら（2021）は、キャリア形成科目の履修を通じて社会人基礎力がどのように向上するかを実証的に検討し、専門教育での学びの自覚や対人関係の経験が自律的課題対応力と関係していることを示している。また佐藤ら（2022）は、大学の体育の授業において、協働的な学習活動を通じた経験が心理的な気づきや行動変容を促し、結果として主体性や対人関係能力といった社会人基礎力の向上に寄与する可能性を示している。

このように大学教育において社会人基礎力が注目される一方、経済産業省の指標が大学生の資質や行動傾向を捉える上で十分に妥当であるかについては、疑問を呈する声もある（江口と児玉，2020）。こうした課

表4 本研究の調査で使⽤した社会人基礎力尺度の因子と項目（大対ら（2018）をもとに作成）

因子	項目
伝える力	自分の考えを分かりやすく整理して、相手に理解してもらえるように伝える力
	自分の言いたいことを、わかりやすく効果的に伝える力
	限られた時間の中で、情報や主張をわかりやすく聞き手に伝える力
	仲間うちにしか伝わらないような言葉で話したりせず、誰もが理解できるように話す力
	情報を伝えるために、必要な創意工夫を加える力
	提案するだけでなく、自ら目の前の課題に取り組む力
	状況に応じて、自らの発言や行動を適切にコントロールする力
働きかける力	話しやすい雰囲気をつくって、相手の意見を引き出す力
	自分の感情にふたをせず、受けとめる力
	お互いの個性や能力を理解し、それが発揮できるような関係を築く力
	失敗を恐れず、行動に移す力
	目標を達成するために周りの人に呼びかけて、周囲の人を動かす力
	指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む力
協調する力	既存のやり方やマニュアルにとらわれない考えを受け入れる力
	相手の立場や意見を尊重する力
	周りの人との会話や表情などから、人間関係や状況を把握しようと努める力
	集団や社会生活の規則やルールを守って適切に行動する力
	他者と共有する「空気」を読んで、自分の行動を修正する力
	相手の言動を観察し、意見や主張を正確に聞き取る力
考える力	行動した結果、何がうまくいき何がうまくいかなかったのかを考える力
	目標を達成するための手段や方法について優先順位を決定する力
	自分に必要な情報や資料を的確に探し出す力
	自分はほんとうにどうしたいのか、誠実に自分の気持ちを見つめる力
	目標を達成するために解決すべき問題を見つける力
	あらゆる可能性を再検討することで、解決方法を再発見する力

題を踏まえ、大対ら（2018）は先行研究を基盤に、大学生に特化した社会人基礎力の測定尺度を開発した。この尺度ではコミュニケーション能力が重視され、「効果的に伝える力」（以下、「伝える力」）、「人や環境に働きかける力」（以下、「働きかける力」）、「協調する力」、「考える力」の4因子から構成される。各因子は5～7項目、全25項目で構成されている。各項目は大学生の日常的な対人場面や学内外での活動を想定した具体的な表現で作成されており、信頼性・妥当性も確認されている。

JLPのボランティア活動では、留学生や他のボランティアとの継続的な交流が求められるため、大学生に特化し、かつコミュニケーション能力を視野に入れた大対ら（2018）の尺度は、本調査の目的に適合すると考えられる。以上から、この4因子25項目を質問紙に採用し、JLPのボランティアを対象に調査を行った。

3. 2 社会人基礎力調査

社会人基礎力の調査は、性格特性の調査と同時期に、Google Formsを用いて実施した。各項目に対しては、それぞれの力が「まったくない」から「十分ある」までの4段階で評価を求めた（4件法）。性格特性調査での有効回答数は63であったが、社会人基礎力の調査では欠損値があった1名を除外したため、有効回答数は62となった。質問紙調査の結果を表5に示す。4つの因子のうち、平均値が最も高かったのは「協調する力」であり、最も低かったのは「考える力」であった。ただし、「働きかける力」と「伝える力」との差はごくわずかである。

次に、社会人基礎力の各因子得点におけるクラスター間の差異を検討するため、「伝える力」、「働きかけ

表5 社会人基礎力の4因子における得点の基本統計量（ $n = 62$ ）

因子	平均値	標準偏差	最小値	最大値	信頼区間 平均	
					95%下限	95%上限
伝える力	3.016	0.427	1.571	4	2.907	3.126
働きかける力	2.978	0.495	1.833	4	2.851	3.105
協調する力	3.415	0.370	2.333	4	3.321	3.510
考える力	2.937	0.470	1.833	4	2.817	3.057

表6 社会人基礎力得点におけるクラスター間の分散分析および多重比較の結果（平均値・標準偏差）

社会人基礎力	C1 ($n = 31$)	C2 ($n = 19$)	C3 ($n = 12$)	一元配置分散分析	多重比較 (Holm法)
伝える力	2.862 (0.382)	3.308 (0.41)	2.952 (0.318)	$F(2, 59) = 8.328, p < .001$ $\eta^2 = .220$	C2 > C1 C2 > C3
働きかける力	2.86 (0.458)	3.298 (0.499)	2.736 (0.313)	$F(2, 59) = 7.667, p = .001$ $\eta^2 = .206$	C2 > C1 C2 > C3
協調する力	3.296 (0.359)	3.57 (0.361)	3.50 (0.31)	$F(2, 59) = 3.989, p = .024$ $\eta^2 = .119$	C2 > C1
考える力	2.774 (0.377)	3.246 (0.54)	2.861 (0.308)	$F(2, 59) = 7.556, p = .001$ $\eta^2 = .204$	C2 > C1 C2 > C3

C1=クラスター1、C2=クラスター2、C3=クラスター3

る力」,「協調する力」,「考える力」を従属変数とし、一元配置分散分析 (ANOVA) を行った。いずれの因子においても有意差が確認されたため、Holm 法による多重比較を実施した。なお、本研究では有意水準を 5% (両側) に設定した。分析結果を表 6 に示す。

多重比較の結果,「伝える力」では、クラスター 2 がクラスター 1 よりも平均値が有意に高く ($d = 1.174$, $p < .001$), またクラスター 3 よりも 5%水準で有意に高かった ($d = 0.936$, $p = .028$)。一方、クラスター 1 とクラスター 3 の間には有意な差は認められなかった ($d = 0.338$, $p = .238$)。

「働きかける力」においても、クラスター 2 はクラスター 1 ($d = 0.978$, $p = .004$), クラスター 3 ($d = 1.255$, $p = .004$) よりも有意に高い得点を示した。クラスター 1 とクラスター 3 の間には有意差は見られなかった ($d = 0.338$, $p = .418$)。

「協調する力」では、クラスター 2 がクラスター 1 より有意に高い平均値を示した ($d = 0.781$, $p = .028$)。一方で、クラスター 2 とクラスター 3 ($d = 0.582$, $p = .185$), クラスター 1 とクラスター 3 ($d = 0.200$, $p = .590$) の間には有意差は確認されなかった。

「考える力」においても、クラスター 2 はクラスター 1 ($d = 1.115$, $p < .001$), クラスター 3 ($d = 0.910$, $p = .033$) より有意に高く、クラスター 1 とクラスター 3 の間には有意差は見られなかった ($d = 0.206$, $p = .548$)。

以上の結果から、クラスター 2 は「伝える力」,「働きかける力」,「考える力」の 3 つの因子において、クラスター 1 およびクラスター 3 よりも有意に高い得点を示す傾向が確認された。一方、「協調する力」では、クラスター 2 はクラスター 1 よりも有意に高かったものの、「協調する力」は全体として比較的高い水準にあり、クラスター間の差異は相対的に小さいことが示された。

3. 3 社会人基礎力に関する考察

以上、性格特性のクラスターごとに大対ら (2018) の社会人基礎力の 4 因子 (「伝える力」,「働きかける力」,「協調する力」,「考える力」) の得点を比較し、それぞれの傾向を明らかにした。

まず全体的な傾向として、「協調する力」についてはどのクラスターのボランティアでも高得点であり、調査対象のボランティアには、対人関係における配慮や相手を尊重する姿勢が共通して見られた。

クラスター別に見ると、クラスター 2 のボランティアは 4 因子すべてにおいて比較的高い得点を示し、特に「伝える力」,「働きかける力」,「考える力」で他のクラスターより有意に高かった。これは、クラスター 2 のボランティアが、自分の考えを適切に言語化して他者に伝えたり (「伝える力」), 他人や周囲の環境に働きかけて行動を起こしたり (「働きかける力」), 課題に対して論理的に考え粘り強く取り組んだりする (「考える力」) といった行動上の傾向を持っていることを示唆している。

一方、クラスター 1 およびクラスター 3 のボランティアは、社会人基礎力の 4 因子においていずれも相対的に低い傾向が見られた。特に「働きかける力」,「考える力」,「伝える力」の得点がクラスター 2 のボランティアに比べて有意に低く、自ら積極的に行動を起こしたり、自分の考えを他者に発信したりする場面において、慎重な姿勢がうかがえる。

前節ではビッグファイブ理論に基づいて性格特性の分析を行ったが、本節で検討した社会人基礎力の分析結果と照合すると、性格特性と社会人基礎力との間には一定の関連が認められる。たとえば性格特性で、外向性, 開放性, 誠実性の得点が高かったクラスター 2 のボランティアは、「伝える力」や「考える力」といった、積極的なコミュニケーションや課題対応に関わる力においても高得点を示していた。一方、神経症傾向が高いクラスター 1 や、外向性および開放性が低いクラスター 3 のボランティアにおいては、自発的な発言や行動に関連する力において、相対的に低い得点であることが確認された。次節では、これらの結果を踏まえ、性格特性と社会人基礎力の関係性を総合的に捉えつつ、ボランティアへの支援の在り方について検討する。

4 総合的考察

ここまで、ビッグファイブ理論をもとにボランティアの性格特性について検討し、続いて大対ら（2018）の枠組みに基づいて社会人基礎力の傾向を分析した。両調査の結果を総合すると、クラスター2のボランティアは精神的に安定しており、外向的で周囲と協調しながら活発に行動する傾向がうかがえる。一方、クラスター1とクラスター3のボランティアは、社会人基礎力の4因子いずれにおいても有意な差は認められず、社会的場面では積極的に周囲と関わったり主体的に課題に取り組むというよりも、状況を見極めながら行動を調整しようとする傾向がうかがえる。

しかし性格特性に注目すると、両者は異なる特性を有していた。クラスター1のボランティアは神経症傾向のみが顕著に高く、他の性格特性因子が低かった。これに対しクラスター3のボランティアは外向性と開放性が顕著に低く、協調性のみが高いという特徴が見られた。このことは、一見、社会的場面において似たような行動傾向が見られたとしても、その背景にある心理状態や動機には違いがある可能性を示唆している。

社会人基礎力の「協調する力」を例にとると、クラスター1およびクラスター3のボランティアのいずれも同程度の得点であった。しかし性格特性においては、クラスター1は協調性が低く、クラスター3のボランティアは高いというように、対照的な傾向が見られた。このことから、クラスター3のボランティアは、もともとの性格特性から無理なく協調的な行動を取っているのに対し、クラスター1のボランティアは、不安や緊張を抱えながらも、周囲に合わせようと努力している可能性がある。このような構図は、「働きかける力」や「考える力」といった他の社会人基礎力にも当てはまると考えられる。たとえば、課題への取り組みや周囲との協働といった場面において、クラスター1のボランティアは、内面的な不安や自信のなさを抱えながらも、与えられた役割を何とか果たそうと懸命に努力している可能性がある。一方、クラスター3のボランティアは、外向性の低さから、自ら積極的に関与するというよりは、場の雰囲気や他者の期待に応じることが受動的に行動を起こしていると思われる。

本研究を通して、JLPに参加する学生ボランティアの多様性が明らかになった。ここで改めて注目されるのは、今回の調査において、クラスター1およびクラスター3に該当するボランティアが多数を占めていた点である。これらのタイプの学生は、多様なバックグラウンドを持つ参加者が交流するJLPのような場には、一見すると不向きであるようにも思われる。

では、そのようなタイプの学生が、なぜJLPに参加しているのだろうか。本研究ではボランティア活動の動機について直接的な調査は行っていないが、ひとつの可能性として、「異文化交流に関心はあるが、これまでなかなか一歩が踏み出せなかった」、「人とかかわりに苦手意識がある自分を変えたい」といった内発的な動機の存在が考えられる。この推測を裏付けるように、授業評価アンケートの自由記述には、「異文化に触れることで視野が広がった」、「最初は不安だったが、徐々に自信がついた」など、成長や変容に関する記述が少なからず見られた。JLPは本来、留学生に対する日本語教育プログラムであるが、学生ボランティアにとっても成長や自己変容の機会として受け止められていることが示唆される。JLPとしても、ボランティアが自分の可能性を広げ、安心して活躍できるよう、柔軟で個別性に配慮した支援体制を構築する必要がある。

まず全体に対しては、これまで実施してきたボランティア向けワークショップの内容を再検討したい。たとえば、ボランティアの多様性に配慮したケーススタディを導入することで、活動のイメージがより具体的になり、参加への心理的ハードルも下がることが期待される。また授業内においては、ボランティアの役割を明確に提示し、安心して活動に参加できる環境を整えることが求められる。

加えて、ボランティア同士が支え合いながら活動できるよう、相互支援の仕組みを強化することも重要で

ある。活動中に感じた戸惑いや悩みを共有できるよう、定期的な振り返りの機会や話し合いの場を設けることは、特に不安傾向の高いクラスター1のタイプのボランティアにとって効果的であり、心理的負担の軽減や安心感の醸成に寄与すると考えられる。

また、留学生とボランティア、あるいはボランティア同士の交流促進を目的としたイベントの開催も有効であろう。留学生と協働しながら企画・運営する機会を設けることで、リーダーシップや実践的な対人スキルの育成も期待できる。とりわけクラスター3に該当するボランティアにとっては、こうした企画・運営への関与が、主体性を育むうえで有意義な機会となるだろう。

JLPは、交換留学生に対する日本語教育プログラムであると同時に、学生ボランティアに自己変容や成長の機会を提供する場でもある。本研究の知見は、学生ボランティアの成長を支援する上で、性格特性や社会人基礎力の傾向を踏まえた、個別のかつ柔軟な支援体制の必要性を示している。今後は、こうした知見を基に、学生ボランティアの内発的動機や心理的特性に寄り添いながら、一人ひとりの成長をより確実に支えていくことが求められる。

5 まとめと今後の課題

本研究では、日本大学日本語講座（JLP）の学生ボランティアの特性を、性格特性と社会人基礎力の観点から明らかにし、その結果をもとに効果的な支援策を検討した。

まずビッグファイブ理論に基づきボランティアの性格特性についてクラスター分析を行い、外向性、協調性、誠実性、神経症傾向、開放性の観点から類型化した結果、3つのクラスターに分類された。クラスター1は神経症傾向が高く、他の特性が低いタイプ、クラスター2は神経症傾向が低く、他の特性が全般的に高いタイプ、クラスター3は協調性は高いものの、外向性と開放性が低いタイプであった。

続いて、大対ら（2018）の尺度を用いて社会人基礎力を調査したところ、クラスター2は「伝える力」、「働きかける力」、「協調する力」、「考える力」のいずれにおいても高い傾向を示した。一方、クラスター1とクラスター3との間には、いずれの因子でも有意な差は見られなかった。社会人基礎力から推測すると、クラスター2は外向的で人間関係の構築にも前向きであり、自ら新しいことに積極的に取り組む特性を持つと考えられる。

他方で、外向性や開放性が低いクラスター1および3のボランティアは、自ら積極的に他者と関わろうとしない傾向が共通しているものの、その背後にある心理的要因には違いがあった。クラスター1は、不安や緊張といった情緒的要因が行動を抑制している可能性があり、クラスター3は、内向的な気質や開放性の低さに関連して、新しい経験や価値観に対して慎重になる傾向が影響している可能性がある。これは、社会的場面で一見似た行動が見られたとしても、背景にある特性は異なる場合があることを示しており、ボランティア支援においては、行動面だけでなく、その背後にある個々の特性に応じた対応が必要である。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。まず本研究は量的調査に基づくものであり、活動動機や、活動を経ての成長や変容といった内面的プロセスを十分に捉えられていない。今後は自由記述やインタビューなど質的調査を通じて、より深い理解を得ることが望まれる。また、本研究では性別、年齢、学部、学年、ボランティア経験の有無や長さといった要因を十分に考慮していない。これらも活動への関わり方や心理的傾向に影響を与えている可能性がある。これらの要因を踏まえた分析も、今後の課題としたい。

引用・参考文献

- Asendorpf, J. B., Borkenau, P., Ostendorf, F., & Van Aken, M. A. G. (2001), "Carving personality description at its joints: Confirmation of three replicable personality prototypes for both children and adults." *European Journal of Personality*, 15 (3), 169-198.
- Costa, P. T., and McCrae, R. R. (1992), *Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-R) and NEO Five-Factor Inventory (NEO-FFI) professional manual*. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.
- 江口圭一・小玉一樹 (2020), 「社会人基礎力に関する一考察」『福山平成大学経営学部紀要』第16号, 33-53 ページ.
- Goldberg, L. R. (1981), "Language and individual differences: The search for universals in personality lexicons." In L. Wheeler (Ed.), *Review of Personality and Social Psychology*, Vol. 2. Beverly Hills, CA: Sage.
- Gosling, S. D., Rentfrow, P. J., and Swann, W. B. Jr. (2003), "A very brief measure of the Big-Five personality domains." *Journal of Research in Personality*, 37 (6), 504-528.
- 引原有輝・森田啓・若林斉・金田晃一 (2016), 「実技種目の異なる大学体育授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響」『大学体育学』13号, 16-25 ページ.
- 嘉瀬貴祥・上野雄己・大石和男 (2017), 「パーソナリティ・プロトタイプに基づいた大学生の類型化と精神的健康の関連」『日本健康教育学会誌』第25巻第3号, 195-203 ページ.
- 嘉瀬貴祥・上野雄己・梶内大輝・島本好平 (2018), 「パーソナリティ・プロトタイプにおける Resilients, Overcontrollers, Undercontrollers, およびその他のタイプの特徴—ライフスキルの高低に基づいた検討」『パーソナリティ研究』第27巻第2号, 164-167 ページ.
- 経済産業省 (2006), 「社会人基礎力に関する研究会—「中間取りまとめ」—」<https://warp.dandl.go.jp/info:ndljp/pid/282046/www.meti.go.jp/press/20060208001/shakaijinkisoryoku-honbun-set.pdf> (2025年6月9日閲覧)
- 新居田久美子・三谷周子・平野園恵 (2021), 「社会人基礎力からみた大学キャリア教育の効果と課題—人生100年時代の社会的レリバンス—」『神戸学院大学教育開発ジャーナル』第11号, 1-11 ページ.
- 大対香奈子・堀田美保・本岡寛子・直井愛里 (2018), 「大学生の社会人基礎力測定尺度の開発」『近畿大学総合社会学部紀要』第7号, 51-59 ページ.
- 小塩真司 (2010), 『はじめて学ぶパーソナリティ心理学：個性をめぐる冒険』ミネルヴァ書房.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ・ピノ (2012), 「日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み」『パーソナリティ研究』第21巻第1号, 40-52 ページ.
- 佐藤和・引原有輝・金田晃一 (2022), 「大学体育受講者のパーソナリティと社会人基礎力得点の関係」『大学体育スポーツ学研究』第19号, 29-37 ページ.
- Soto, C. J. (2015), "Is Happiness Good for Your Personality? Concurrent and Prospective Relations of the Big Five With Subjective Well-Being." *Journal of Personality*, 83 (1), 45-55.
- 田川恭識 (2025), 「留学生と日本の大学生とが自律的に学びあう場の構築—日本大学日本語講座における Language Exchange Partner 制度の事例から—」『日本語教育方法研究会誌』第31巻第2号, 96-97 ページ.
- 田川恭識・中村律子 (2018), 「学習者の主体的な学びを実現するためのカリキュラム構築—日本大学日本語講座におけるカリキュラム構築の過程と実践—」『2018年度日本語教育学会支部集会予稿集』, 12-17 ページ.
- 田中存・管千索 (2007), 「大学生活不安に関する心理学からのアプローチ」『和歌山大学教育学部紀要. 教育科学』第57巻, 15-22 ページ.
- 谷伊織 (2021), 「パーソナリティと生き生き働く状態の関連性—プロトタイプと一般因子による検討—」『Works Discussion Paper』第47号, 1-12 ページ.